論　文

中国土家族における民族観光開発と地元住民の対応
―彭家寨の事例をめぐって―

黄　秋実

Ethnic Tourism Development in the Tujia Ethnic Group of China and the Response of Local Residents: A Case Study of Pengjiazhai

HUANG, Qiushi

Abstract

This study focuses on the tourism development of Pengjiazhai, a minority region located in Xuan'en County, Hubei Province, China, and explains it in the context of China's poverty reduction program. Based on fieldwork, the development process of Pengjiazhai, the relationships between the government, tourism companies, and local residents were identified, focusing particularly on the response of the local residents and discussing its relevance and impact.

In the introduction, the situation of poverty reduction programs and minority tourism development in China is touched upon, explaining the objectives and methods of this study.

Chapter One analyzes in detail the tourism development process in Pengjiazhai. Under government leadership, in collaboration with external tourism companies, the development process, including local residents' participation, is described. It also demonstrates that the efforts of local ethnic elites and the active participation of local residents have contributed to development.

Chapter Two discusses in detail the impact of minority tourism development in Pengjiazhai on local residents and their responses. While highlighting positive impacts such as economic growth and increased employment, it is also shown that local residents are developing their own businesses and actively engaging in tourism development.

This research reveals that government-led development helps overcome the disadvantages of tourism development in remote minority areas, having brought economic benefits to local residents. However, the involvement of external tourism companies has also led to some conflicts among local interest groups. Currently, local residents are exploring ways to participate in tourism development by utilizing regional resources.

Considering the above findings, future challenges include uncovering the maintenance and strengthening of local residents' identities, and their relationships with guests.

Keywords: Minority Tourism, Tourism Development, Tujia Ethnic Group, Local Residents, Pengjiazhai

要旨

本研究では，中国の湖北省宣恩県に位置する少数民族地域，彭家寨（Pengjiazhai）の観光開発に焦点を当て，中国の貧困削減計画を背景に説明した。フィールドワークに基づき，彭家寨の開発経緯

や政府，観光会社，地元住民との関係を明らかにし，地元住民の対応に焦点を当て，その関連性や影響について論じた。

はじめにでは，中国の貧困削減計画と少数民族観光開発の状況に触れ，本研究の目的と研究方法を説明した。

第一章では，彭家寨の観光開発プロセスを詳細に分析した。政府主導のもとで，外部の観光会社と連携し，地元住民の参加を含む開発の過程を説明した。また，地元の民族エリートの努力と地元住民の積極的な参加が開発に寄与していることを示した。

第二章では，彭家寨の少数民族観光開発が地元住民に与える影響と彼らの対応について詳細に議論した。経済成長や雇用の増加などのポジティブな影響と同時に，地元住民は独自のビジネスを展開し，観光開発に積極的に関与していることが示された。

本研究から，政府主導の開発が遠隔の少数民族地域における観光開発の不利条件を克服する助けとなることが明らかになった。観光開発は地元住民に経済的利益をもたらした。しかしながら，外部の観光会社の関与により，地元の利益集団間に一定の対立も生じている。現在，地元の住民は地域の資源を活用して観光開発に参加する手段を模索している。

以上の内容を踏まえ，地元住民のアイデンティティ維持と強化や，ゲストとの関係を明らかにすることを今後の課題としたい。

キーワード：少数民族観光，観光開発，土家族，地元住民，彭家寨

はじめに

1. 研究背景と目的

中国には55の少数民族が存在し，彼らの独自の文化や伝統は国の豊かな文化資源となっている。これらの文化資源は観光開発の重要な要素となり，地域の魅力や観光資源として活用されている。

2010年には，中国政府は『全面的に貧困を撲滅するための行動計画』を策定し，2030年までに絶対的な貧困を根絶することを目指している。貧困撲滅のためには地域の経済発展が不可欠である。中国では，貧困地域の産業振興や観光開発，農村観光などを通じて地域の経済活性化を図り，貧困削減に取り組んでいる。これらの取り組みにより，中国では過去数十年間で数億人以上の人々が貧困から脱出したとされており，貧困削減と貧困撲滅に大きな進展が見られている。ただし，依然として貧困地域や困難な状況に置かれた人々が存在しており，持続可能な観光開発のためにはさらなる努力が必要とされている。

少数民族地域は中国の貧困率が高い地域の一部であり，経済的に弱い地域や社会的な格差が存在している。中国における少数民族観光開発は，経済的な後進地域における貧困問題を解決する目的で実施されることが多い。

このような状況に応じて，湖北省恩施土家族苗族自治州宣恩県の「十三五計画」（「国民経済および社会の発展に関する第13次五カ年計画（2016～2020年）」）も，観光を通じて貧困緩和を実現することに重点を置いた。その目的は貧困農村の立ち後れた姿を変え，貧しい農民の雇用を促進し，産業配置を最適化し，社会各方面が積極的に観光と貧困緩和に参加するように誘導することである［武漢華中科大建築規劃設計研究院有限公司　2017］。

2021年の『中国統計年鑑』によれば，土家族の人口は9,587,732人である［中国国家統計局

2021]。土家族は主に湖南省，湖北省，貴州省，重慶市に分布している。本研究では，対象地域を湖北省恩施土家族苗族自治州宣恩県に焦点を当てる。宣恩県の観光開発は，恩施土家族苗族自治州内の他の少数民族地域と比較して後れを取っていた[1]と言えるが，土家族は特有の文化や伝統を持つ民族であり，その文化や風習は観光資源として活用されている。このような背景から，彭家寨の観光開発は，貧困削減の文脈において，土家族民族観光開発の典型的な事例として取り上げる価値がある。

以上，彭家寨は独自の文化や伝統を有する土家族地域であり，その文化が観光資源として活用されている。しかし，土家族地域における観光開発に関する研究が数少ない。さらに，観光開発において地元住民の対応は重要である。本研究の目的は，中国湖北省宣恩県に位置する彭家寨（Pengjiazhai）の観光開発に関する研究を行い，当該地域の民族観光開発の経緯，政府や観光会社と地元住民との関係を明らかにし，地元住民の対応に焦点を当て，その関連性や影響について論じることである。

2. 研究方法

本研究では，研究目的を達成するために以下の調査と分析手法を採用した。これにより，地域の観光開発及び観光開発が地元住民の生活に与える影響を明らかにした。

(1) 地元住民への聞き取り調査

地域の歴史，開発過程，観光開発の実情，住民の生活（開発前後），観光文化などを含む情報を収集するため，地元住民に対する聞き取り調査を実施した。自身の観光開発への感想や村の人間関係（開発前後），将来の計画などに焦点を当て，個人の見解や経験，感想などを収集した。

(2) 政府関係者および観光会社へのインタビュー調査

観光開発の過程や総合計画について，政府関係者および観光会社に対しインタビュー調査を行った。このインタビュー調査により，観光開発に関する専門家の視点からの情報を取得した。

(3) 参考文献の活用

調査や分析に関しては，多様な参考文献を活用して客観的なデータ収集と分析を担保した。これにより，研究の信頼性と客観性を確保した。

3. 先行研究

筆者が「民族旅游開発」（民族観光開発）という単語で中国の論文検索サイトである「CNKI（中国知網）」を検索して出てきた結果に基づいて図を作成した（図１）。図からすぐわかることは，2008年から2017年までの期間に，「少数民族旅行開発」に関する研究数が増加していることである[2]。これは主に少数民族政策，例えば「西部大開発」戦略や「一帯一路[3]」政策などの影響

1　例えば，土家族地域の土司文化を反映している恩施土司城は，1998年に建設された。中国で８番目の人工古都である恩施土家女城は，2013年10月19日に観光客に公開された。

2　例えば，[呉＆張　2008，竜　2009，史　2010，楊　2011，羅　2012，呉＆潘　2013，李＆趙　2014，肖＆唐　2015，曽　2016，胡　2017]。

3　中華人民共和国が2017年から推進し続け，中国と中央アジア・中東・ヨーロッパ・アフリカにかけての広域経済圏の構想・計画・宣伝などの総称を指す。

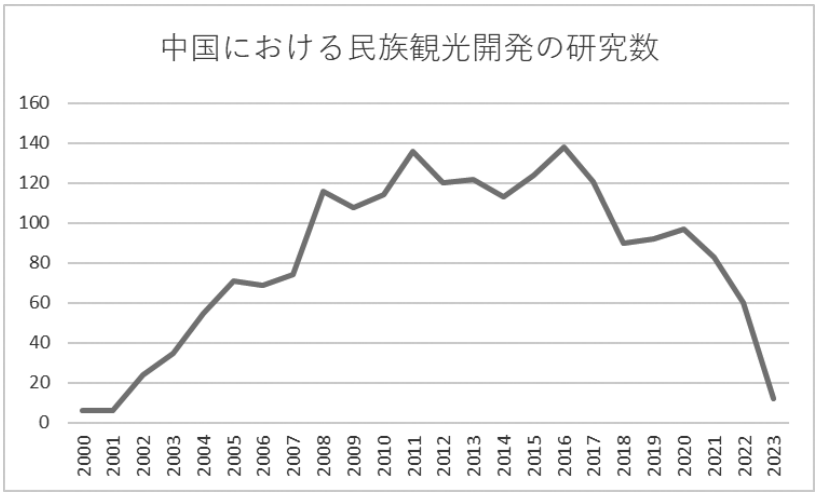

図１　中国における「民族観光開発」に関する研究数　出所：筆者作成

を受けていた。この時期，研究者は積極的に少数民族観光の発展の道筋を探索し，少数民族地域の経済発展，文化保護，そして観光業の持続可能な発展を促進することに焦点を当てた。

中国における少数民族観光開発と地元住民に関する先行研究からは，以下の要点が示されている。

曽［1998］は，少数民族住民が積極的に観光活動に参加していることを明らかにした。その活動には，伝統的な歌舞のパフォーマンス，漢族言語の学習，地元の特産品の販売などが含まれており，同時に農業や日常生活も両立している。一方，地域の若者は民族ショーに従事したり，地元の民族レストランでウェイターやコックとして働いたりしながら，近隣の都市での出稼ぎ生活も行っているという。これらの地元住民の観光開発と発展に対する対応は，多くの少数民族観光地域で一般的である。

李ら［2014］は少数民族地域の観光開発が現地の生計方法に及ぼす影響を研究した。研究によれば，現地の土地利用方法が変化し，観光業が農業を上回り，地域の主要産業となり，また若者の就業機会も増加した。また，少数民族地域では住宅の多くが自己居住型だが，地元の人々が自宅を貸し出すケースも多く見られ，これが地元住民の主要な収入源となっている。

兼重［2008］は民族観光の産業化が地元のトン族の人々に与える影響，および彼らの観光客や観光を進める国家や政府に対する対応の一端について考察した。観光化された結果として，伝統文化，民族文化，日常生活，および生活空間にはほとんど手が加えられていない。産業化以降はこれらの要素に対して，直接または間接的に変化をもたらしている状態であるという。この場合，観光産業は地元の資源や文化を商品化し，経済的な利益を追求する一方で，地元の文化や生活様式が商業化や観光の需要に合わせて変容する可能性があると考えられる。

また，少数民族地域の観光開発によって地元住民が受ける利益や課題についても言及している研究も少なくない。高［2006］は次のように指摘した。民族地域の制約によって，土地がほとんどの農民の生計の基盤となっているが，観光開発では広大な土地が必要とされる。政府の作用により，開発者は当時の土地契約価格（通常は市場価格よりも低い）を一括で支払った後，

追加の費用（土地の契約価格以外に，農民に対して支払われる補償金などもある）を支払う必要がない。農民は土地を失った後，土地の価値の上昇や観光開発の成果を享受することが困難だという。吴＆潘［2013］は，大量の外部事業者が観光開発及び観光活動に参入し，市場競争の「優勝劣敗」の作用により，経営手段を持つわずかな地元農民のみが営むホテルや旅館が生き残り，大部分の農民が経営する宿泊施設は業績が不振となり，最終的に観光活動への参加機会を失ってしまうことを補足的に説明した。

これまでの研究は，民族観光開発が地域及び当地住民に与えた影響に焦点を当ててきた。これらの研究は，少数民族地域の観光開発が現地の生活や社会構造に深い影響を与えていることを示している。一方で，観光開発は地元住民に経済的恩恵をもたらし，現地の住民の所得や雇用機会を向上させる一方，土地の喪失，不平等な雇用機会（人脈がないと雇用機会がないなど）の問題などに直面することがある。本研究の調査対象である彭家寨はその典型的な事例である。本研究は，このような複雑な現象を具体的に分析し，地元住民の立場や意見から考察する。

また，土家族地域における観光開発及び地元住民の対応に関する研究が数少ない。さらに，新たな時代の背景（社会変動や文化接触の増加，現代の状況と価値観の変化など）において，地元の住民が観光開発にどのように対応しているかを研究する余地がある。

彭家寨の地元住民の伝統文化や日常生活空間自体が観光の対象となっており，観光開発の進行が予測される。観光開発の進行に伴い，地元住民の生活や生計など多岐にわたる側面に重大な影響が及ぶ可能性が考えられる。また，政府と観光会社の参入により，地元住民との権力関係や利益関係も検討すべきであろう。少数民族観光開発と現地の住民の対応をより深く理解するために，以下の領域で深層的なインタビューを行い，開発経緯や特徴，地元住民の対応を探究することが目的となっている。具体的には，彭家寨における少数民族観光開発の政策的背景と発展傾向，観光開発が現地の経済，社会，文化に及ぼす影響，および現地住民の観光開発に対する態度，行動，対処策に焦点を当てている。

第一章　彭家寨における民族観光開発について

1．開発経緯

彭家寨は湖北省恩施土家族苗族自治州宣恩県に位置し（図２～図３），恩施空港と恩施駅から約90キロ離れている。水害により湖南省永順市から移住してきた彭氏一族がこの地域に定住し，繁栄して現在の彭家寨が形成された。村内では基本的に彭姓の人々が多く，外姓は３つしか存在しない。またそれらの外姓も彭氏の子孫であるとされている。住民たちは米，サツマイモ，トウモロコシ，ジャガイモを主に栽培し，豚，牛，羊，鶏，アヒルを飼育していた。住民の主要な収入源は農業や畜産を中心とした第一次産業であり，生活水準は低い。また，若者は勤め人が多く，「留守児童[4]」や「空巣老人[5]」が多く存在している。

筆者の2021年11月から2022年３月の調査結果によれば，彭家寨には50余りの世帯があり，総計で300人近くが居住している。村の住民は全員が土家族であり，話される言語は宣恩方言と漢語である。『宣恩県誌』によれば，宣恩県の土家族と漢族の交流は古くからあり，漢文化の影響

[4] 親が出稼ぎに出て故郷に残された子供。

[5] 子供が独立し家を離れ，子供とは別々に暮らす親。

図２　湖北省恩施土家族苗族自治州の位置と宣恩県の位置　出所：筆者作成

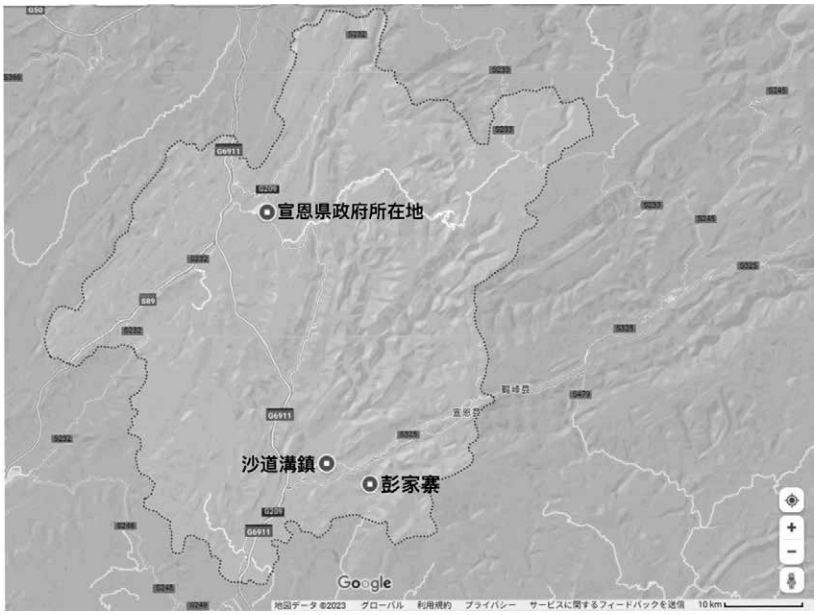

図３　彭家寨の位置　出所：GOOGLE MAP

を受けており，南宋時代（1127年―1279年）には一部の地域で土家族語（巴語）と漢語が混在して使用されていた。交流の中で漢語の利便性が高かったため，地域の言語も徐々に漢語に取って代わられてきた。80年代になると，土家族語を話す人はごくわずかな高齢者のみとなり，彼らもごくわずかな単語しか覚えていない状態になった。

彭家寨の発見と保存は，中国華中科技大学建築学部の創設者の一人である張良皐によって実現された。張は1999年に恩施州の人民政府に書簡を送り，「宣恩沙道溝－両河－龍潭」一帯の保護を提案した。これによって彭家寨は無名の小さな村から「全国重点文物保護単位[6]」となった。

[6] 中華人民共和国の文化遺産保護制度の一つである。中華人民共和国国務院が制定した文化遺産保護制度のうち，国家級の文化遺産に対して制定される名称である。

また，2002年に彭家寨は恩施州級の文化財保護ユニットに指定された。2009年には湖北省の省級民族特色村落となり，「特色村落の保護と開発」プロジェクトに組み込まれた。さらに2014年には国家民族委員会によって「中国の少数民族特色村落」として選定され，観光開発が開始された。彭家寨は正式な開放前にも多くの観光客が訪れ，入場料は不要であった。宣恩県の「十三五計画」では観光を通じた貧困緩和が重要な焦点とされている。

また，彭家寨の吊脚楼の一部は，開発が始まる前から減少傾向にあった。吊脚楼は土家族の伝統的な建築で，彭家寨の観光開発の核心である［『彭家寨景区発展規劃』[7]］。孫［2020］により，土家族の吊脚楼は，山に沿って建てられ，一般的には「底層架空[8]」という形式が採用されている。これは地元の湿気の多い気候に適応し，家屋を湿気から遮断し，良好な通風を促進し，また毒蛇や野獣の攻撃を防ぐのに役立っている。観光地のガイドの説明によれば，彭家寨の吊脚楼は，主に住居階，底層，屋根裏の３つの階層に分けられている。家屋の内部は，一階が豚舎，二階が居住部分である。屋根裏は主に土家族の穀物を補完するための貯蔵室として使用されている。これは熱の放散や湿気，カビの防止等，穀物の貯蔵に最適な造りとなっている。

彭家寨では一部の住民による無秩序な建設が行われ，深刻な安全上の問題を引き起こしていた。古い家屋を破壊し，新たな建物を建てるか，古い建物に手を加えることで，村の歴史的特徴や建築物の外観を損なっている場合もあった。このような状況から，吊脚楼の保護が急務とされる。吊脚楼群の保護は，吊脚楼が文化的な遺産として価値があるだけでなく，無秩序な建設による安全上の問題を解決し，地域の歴史的特徴や伝統を保護するためでもある。

さらに，陶ら［2023］によれば，武陵山地域は，湖南省，湖北省，重慶市，貴州省の71の県（市，区）からなり，土家族，苗族，侗族など９つの少数民族の集積地であり，独特の地域文化を持っている。1990年代以降，武陵山地は少数民族の特色ある文化資源を活かし，特に恩施地区はその代表的な地域である。しかし，彭家寨の開発計画の説明によれば，これまで人文観光の発展（自然景勝地に比べて）は遅れており，民族の特色を生かした質の高い景勝地や民族村が不足しているという現状がある。

以上，彭家寨は，国家および政府の政策支援と地元の古建築群の発見と保護の必要性によって，地域の民族観光開発が促進されている。彭家寨は民族観光資源に恵まれている一方で，観光業が立ち遅れている状況も開発の一つの要因だと考えられる。

2. 開発の現状と動向

インタビュー調査の実施期間は2022年12月から2023年１月であり，調査地点は彭家寨景区内となる。半構造化インタビュー形式を採用し，主に年齢，職業，家族構成などの基本情報，村落の歴史と変遷，観光開発の影響，現在の生活状況，将来の計画などの内容について調査を行っていた。また，インタビュー対象者の同意を得た上で録音を行い，データ分析にはCSCAT分析法を使用した。本研究で使用された調査データは，表１に示す通りであり，合計13人いる。

7　政府内部資料，著者や発行元情報がない。

8　低層階が空洞になっており，支柱や梁によって高く浮かび，家の上部は住居として使用される。

表1　インフォーマント一覧表　出所：筆者作成

	性別	年齢層	職業
A	女性	50代	農家楽
B	女性	50代	農業
C	女性	50代	農業
D	男性	60代	農家楽
E	男性	20代	医者（バイト）
F	男性	70代	退職（村の前書記）
G	女性	40代	農家楽
H	女性	50代	景区の清掃員
I	女性	30代	景区の受付
J	男性	40代	景区の警備員
K	男性	20代	大学生
L	男性	80代	農家楽
M	男性	70代	退職

(1) 政府の主導権

宣恩政府は観光開発の計画，政策，規制の策定と実施を担当する。また，政府は彭家寨の観光開発の長期的な戦略を策定し，その実施を監督する。この戦略には，観光資源の評価，開発方針，インフラ整備，環境保護，マーケティング戦略などが含まれる。また，政府は観光業の全体的な規制と管理を行い，安全基準の確保，環境保護，文化遺産の保護などを担当する。そして，政府の観光開発決定後，投資誘致を行い，村の基礎施設建設が開始された。

政府は彭家寨の観光資源を PR し，観光客の誘致や地域の知名度向上を図っている。彭家寨の場合，政府や観光協会が彭家寨の魅力を積極的に広報し，観光客へのアピールを行っている。

また，政府は地方自治体（村）との連携を通じて彭家寨の観光開発を進めている。例えば，村の観光開発の初期段階では，政府の呼びかけにより，L は村で最初の農家楽[9]を開業した。その当時政府の役人が観光開発の指導のために頻繁に村に訪れ，お茶を飲んだり食事をしたりするニーズがあった。そのため，L は政府の奨励のもとで農家楽をやり始めた。

ここで地元住民が語った投資者，観光会社と政府のやりとりを通じて，観光会社と政府の関係及び政府の主導権を述べていきたい。政府は投資する企業を誘致し，観光会社が入札・投資・建設を行う。最終的な工事の受け入れは政府が決定するため，投資家は受け入れを担当する政府関係者に贈り物や飲食を手配しなければならず，タバコやお酒も用意した後，受け入れを行い，一部の工事費を支払う。結果として，関係作りや接待の費用と労力に見合った対価を得ることができなく，多くの投資家は泣くに泣けず笑うに笑えなかった。そのため，このような政府主導の観光会社による開発は，いくつかの問題を引き起こしていた。

上述から総合的に分析することによって，中国の彭家寨における観光開発における政府主導の影響と役割が明らかにすることができた。しかし，このような開発は，資金調達と開発効率の向上に寄与する一方で，地域内で政府，観光会社，投資家との間に一部の軋轢を引き起こしている。

[9] 農家楽は，農村エコツーリズムの初期的な形態である［孟　2023］。

図４　彭家寨平面図　出所：筆者作成

(2) 観光会社による観光開発

彭家寨は2021年８月７日から観光客を迎えはじめた。景区[10]は観光集散センター，咸池（カンチ）観光客乗換センター，「要要」（シュアシュア）街，「中意・国際研学営」，「墨客廊橋」（ボッキャクロウキョウ），「摩霄楼」（マショウロウ），舎巴（シャハ）田園，地仙橋（チセンキョウ），吊脚楼群などの観光スポットで構成されている（図４）。『彭家寨景区発展規劃』によると，「現在の彭家寨景区内は彭家寨の吊脚楼群を中核とし，土家族建築文化と土家族文化を魂としている。彭家寨は活性化，動態化，再生された『土家汎博物館[11]』である」［『彭家寨景区発展規劃』］。彭家寨吊脚楼群は200年以上前の清朝末期に建てられ，最も古いものは1876年に建てられた。現在，幹欄式の吊脚楼[12]が23棟ある。

彭家寨吊脚は，清朝初期に建設され，現存する建築面積が約12000㎡，敷地面積が35000㎡で，龍潭河流域に沿って両河口，劉家湾，符家湾，何家寨，汪家寨，彭家寨，板栗坪，曾家寨，羅家寨，梁家湾，竜潭村と白果壩など多くの土家族村落が分布している（図５）。また村落は山奥にあり，約15㎞に渡って連なる。

咸池乗換センターは，彭家寨景区に観光客が入る「快速通路」（アクセス優先ルート）の重要な駅である。昔の土家族地域は塩不足で，川塩（四川からの塩）が日常的な需要を満たすために運ばれ，咸池はその重要な駅であった。観光開発の際，歴史を踏まえつつ景区へのアクセス経路や住民の交流拠点として新たな機能を付加した。

10　景勝地。

11　「汎博物館」という表現は，博物館が単なる建物だけでなく，複数の村落，生産生活，農業景観を統合した活動的な展示エリアを指すものである。

12　「幹欄式」は，吊脚楼の構造や柱などの支え方を表現する言葉であり，柱（幹）と欄干（欄）の構造を特徴とする。

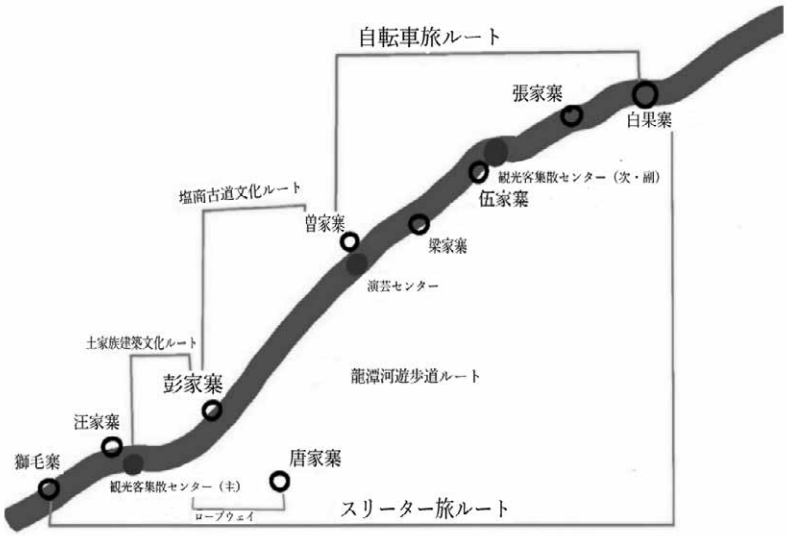

図５　龍潭河辺の土家族村落及び観光開発企画　出所：筆者作成

「要要」街の「要要」は遊ぶという意味であり，新しく建てられた恩施「土家女児城[13]」の商店街に似ている人工古街である（図６）。ここは，「趕集[14]」，ビジネスレジャー，文芸公演の機能を備えている。「要要」街の総敷地面積は20500㎡である。ここは観光会社によって建設された商業街であり，街の至る所に土家族の要素（民族建築・衣装・楽器，伝統行事の壁画，手工芸品）が見受けられる。観光客には少数民族の豊かな雰囲気を持つ地域に入ったような印象を与える。

「摩霄楼」（図７）は開発後に新しく建てられた建物である。「摩霄楼」は土家族の言語で，雲や空に近いという意味である。高さ79.85m の「摩霄楼」は観光レジャー，芸術展示，商業サービス，祈福祈願などの機能を備えている。観光会社のスタッフによると，「摩霄楼」は土家族の人の精神信仰の核心だそうである。しかし，筆者の調査によれば，村の住民の大多数はこれを土家族の精神的象徴とは認識していない。筆者が彼らに彼らの精神的象徴が何であるか尋ねると，彼らはそれを知らないと答えた。「摩霄楼」の向こう側は「舎巴田園」である。豊作の田園という意味である「舎巴田園」は13.33haの水田があり，土家族の農耕文化を体験することができる。

彭家寨では観光が新興産業である。観光会社の統計によると，彭家寨は2021年に正式に観光客を迎える前に，2009年にすでに３万人から５万人の観光客が訪れ，2016年の彭家寨は約８万人の観光客が訪れていた。近年，彭家寨は保存状態の良い吊脚楼群（図８）と優れた自然環境から多くの観光客を集め，観光開発の雛形が見られるが，産業規模を形成するには至っていな

[13] 恩施土家女儿城は，中国４A 級観光地であり，全国的な土家族の非物質文化遺産の継承と保護の拠点および土家族の民俗文化の展示拠点であり，濃厚な土家族の特色を持っている。http://www.hubei.gov.cn/jmct/jcms/lyjq/2021hbly/lymj/202203/t20220307_4028001.shtml

[14] 一般に，県レベル以下の農村地域では，買い物や取引のために集中市場と時間が設定され，人々は市場に出向いて買い物をする，通称「趕集」と呼ばれるものである。

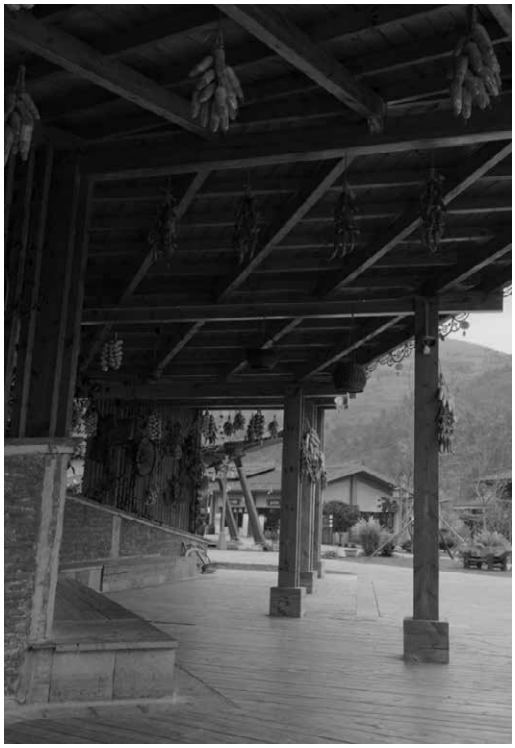

図 6　彭家寨「耍耍」街
出所：筆者撮影（2022年11月）

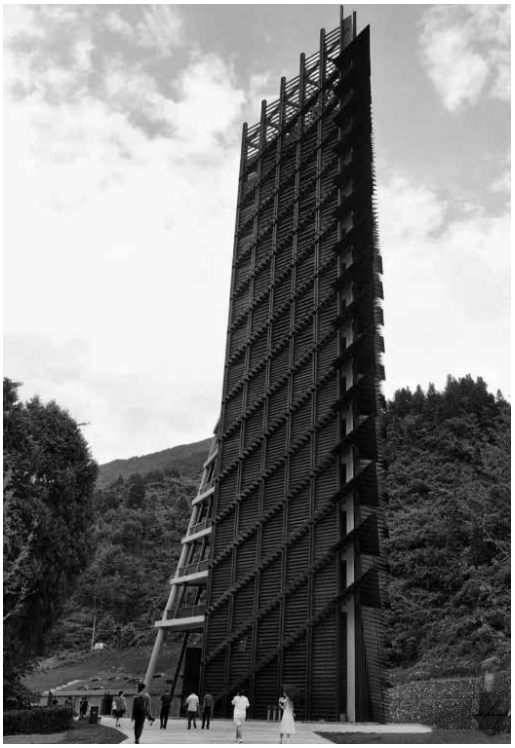

図 7　「摩霄楼」 出所：筆者撮影（2022年11月）

図 8　彭家寨　核心景区　吊脚楼群　出所：筆者撮影（2022年12月）

い。具体的には，観光客の集まる優れた自然環境や保存状態の良い吊脚楼群が観光資源として認識され，観光客が増加している状態でありながら，まだ産業規模やインフラ整備などで整った観光地とは言い難い段階である。

(3) 民族エリートの努力

本研究において言及されている民族エリートは，主にF，LとMである。地元住民の学歴状

況および職業を考慮に入れると，彼らは地元や国内外の高等教育機関で高度な学位を取得し，知識とスキルを磨いている。そして，文化や芸術，教育，文化遺産の保存，地域の発展に関連する職種で従事しており，地域社会に対して積極的に貢献している。そのため，地元住民に「文化人」と呼ばれる彼らを民族エリートとして判断した。

Fは1976年に村に戻り，12年間村長を務めた後，村の共産党党支部書記になった。Mは村で数少ない高校の学歴を持つ人物であり，幼少期から健康状態が良くなかったため，農作業をすることができず，他の人よりも学習に時間を割くことができた。村の人々は彼を「文化人」と称えている。Lも村委員会のメンバーであり，Mの親戚である。Fによれば，彭家寨では2002年に，映画撮影クルーが訪れ，Fと他の村民もエキストラとして参加した。Fは当時，村の書記を務めていた。その後，F，M，と村で最初の農家楽をやっているLと共に報告書を作成し，政府に提出した。その報告書は村の基本状況や吊脚楼群に関するもので，古建築の保護の必要性を強調した。この報告書は県の注目を浴び，県の幹部と地元幹部が一体となって彭家寨の開発に取り組むこととなった。

報告書の作成はFがMとLに依頼した。F自身は教育をあまり受けていなかったため，口述や現地調査・訪問を担当していた。2003年には，民族宗教局が彭家寨を訪れ，吊脚楼群を土家族建築群として登録した。

景区の初期の見積もり投資額は数十万元で，その後，名勝の建設が次々と始まった。Fは「今でこそ数百万元かかるが，当時は数十万元でも相当な投資でした」と自慢げに筆者に語った。彭家寨は宣恩県で最初の国家級保護単位であることも三人の努力によって実現された。

(4) 地元住民の役割

吊脚楼群は彭家寨景区の中心的観光スポットである。観光客は地元の少数民族建築を鑑賞するだけでなく，住民の家を訪問し，直接対話することができる。この点において，地元住民は観光資源の一部となっている。

Eは次のように語った。「私たちの村では，沙道溝鎮に家を建てた人が多いが，この村を出て行く人はいない。なぜなら，多くの人にとって，これが自分の根（終の住処）だからだ。村が開発される前は，空気がきれいで，川が澄んでいて，お年寄りにとても適した環境だった」。地元住民は村に留まり，これまでと同様の生活様式を維持している。これは観光開発プロセスにおいて非常に重要な要素だと考えられる。彼らは自身の暮らしや伝統的な生活様式を通じて，観光客に対してユニークな体験や情報を提供する。これにより，観光客は，地元の文化や風習をより深く理解し，地元住民との交流を通じて豊かな観光体験を得ることができる。

また，地元住民は当地の観光開発において，地元の伝統文化・歴史の継承と共有の役割も果たしている。地元住民は彭家寨の文化や歴史に深く関わり，伝統的な知識や技術を持っている。例えば，農家楽を経営しているDはかつて「薅草鑼鼓[15]」で鼓を叩く役をしていた。彼は自分が最後に鼓を叩いたのは何十年も前であり，今回再び鼓を叩くことが演技のためであるとは夢にも思っていなかったと述べた。

[15] 「薅草鑼鼓」は土家族の集住地域で流行している民間歌曲形式である。通常は二人の民間芸能人を招き，薅草する人々の前でパフォーマンスが行われる。一人は鼓を叩き，もう一人はどらを鳴らし，鼓とどらの音に合わせて歌いながら踊る。薅草をする人々はその横で合唱する。

3. 小括

観光開発以前，彭家寨は恩施土家族苗族自治州の辺境の農村で，農業が主体であり，比較的貧困な地域だった。地元の人々は土家族だが，漢化の程度は明らかに高い。例えば，地元には土家族の言語を話す人はいない。県政府は中央政府の指示に基づいて地元の貧困対策を策定し，彭家寨はその対象の一つとなった。また，彭家寨は潜在的な観光資源を有しており，民族建築や料理，芸能などが含まれている。特に民族建築の一つである吊脚楼群は保護が必要である。これらの要因が地元の観光開発を促進した。

そして開発プロセスでは，政府の主導権，観光会社の役割，地元の民族エリートの取り組み，地元住民の役割などを分析した。

まず，中国の場合，観光開発は行政主導で行われることが多い。宣恩政府は公的な開発経費で道路を整備し，村の外観も土家族式に装飾した。また，外部の観光会社と契約し，観光開発に必要な条件を整えた。地元政府の主導権を分析する際に，筆者は政府と投資家，観光会社との間に経済的矛盾や民族文化の商業化などの矛盾が存在することを発見した。これらの矛盾は地元の住民にとって明らかであるが，誰も口に出さない。

次に，観光会社の動向である。観光会社は観光開発後，開発計画や観光地の位置づけを策定し，いくつかの観光スポットの建設を行っていた。また，観光会社の活動からは，彼らが人工的に古風な建造物を築き，土家族の文化要素を強調し，土家族の精神的象徴を再構築するなどの手段を通じて，地域の観光開発を推進しようとしていることが窺える。しかしながら，これらの行為は地元住民の賛同を得ることはなく，彼らの考え方を変えることすら難しい状況である。

さらに，民族エリートの努力も無視できない。彼らの最初の目的は地元の古い建築物の保護であり，多くの文書を作成し，地元での訪問や現地調査を行い，整理された資料を政府に提出し，政府の注目を集めることに成功した。彼らはこのことを誇りに思っており，筆者も調査の過程で地元住民から彼らへの感謝の言葉を頻繁に聞いた。辺境の少数民族地域では，地元の民族エリートほど現地の状況を理解している人はいない。彼らには先々までの見通しがあり，地元の実情に基づいた具体的な取り組みを行い，観光開発において重要な役割を果たした。

最後に，地元住民の存在自体が観光開発の重要な資源の一部である。彼らの実際の生活状況は観光資源そのものである。さらに，彼らは地元の観光活動に積極的に参加し，土家族の文化を再生し，広めることにより，観光開発に力を発揮している。

一方で，彭家寨に居住する人たちの伝統文化や民族文化，あるいは彼ら自身や日常の生活空間そのものが，観光の対象となるため，観光開発が大規模に進む場合，地元住民は多大な影響を被ることになる。次章では，以上の観光開発後の実状に基づき，観光開発が地元住民にもたらした影響及び彼らの対応を分析する。

第二章　地元住民の対応と関与

1. 観光開発が地元住民に与える影響

観光開発が導入される際には，その地域の住民にさまざまな影響を及ぼす。地域の経済，社会，環境，文化などの側面で変化が生じる可能性がある。観光は一定の経済成長をもたらす一

方で，地元住民の生活や環境にも変化をもたらす。

先述の通り，本研究の対象である彭家寨は，地元住民の伝統文化や民族文化，および彼ら自身や日常の生活空間そのものが観光の対象となる特徴を有している。そのため，観光開発が展開される場合，地元住民は重大な影響を受ける。上述の彭家寨の観光開発の実態に基づき，インタビュー調査によって得たデータを中心に述べていきたい。

経済面での影響を考えると，観光開発は地域の雇用創出に寄与した。新たな観光施設やサービスの提供により，地元住民には就業機会が増えた。K によれば，観光地が建設されて以降，各種施設が拡充されるにつれて，より多くの労働力が必要とされるようになった。特に，観光地内のレストランや商店，ホテルなどは，顧客の需要に応えるために十分なスタッフを確保する必要がある。K の父親世代の多くは，年齢的な制約から出稼ぎを終え，景区での雇用を得ることができた。これにより，地元の人々にとっては安定した収入と雇用機会が提供された。例えば，警備員として働いている J は，観光客の数に関係なく自身の仕事量に影響を受けず，仕事が非常に楽であり，観光地内を自由に歩き回ることができると述べた。もちろん，観光客から道案内を求められたり，景区に関する質問を受けたりすることもしばしばあるが，J は「私は安全管理のみを担当しており，それ以外のことには詳しくありません」と常に答えている。J は朝は出かけて，三食とも観光地の食堂で食事をし，夕方には家に帰るという生活をしている。他にも，清掃員として働く H は毎月15日間勤務し，残りの半月は，沙道溝鎮に住む別の女性が担当している。給料は約1400元である。観光客が少ない時は楽であり，給料も一ヶ月の生活に十分である。

F は先祖代々農業を営んでおり，トウモロコシの栽培や豚の飼育を行っていたが，それだけでは十分な収益を上げることはできなかった。しかし，観光業の発展以降，農家楽を経営できるようになったと述べた。2019年の夏に多くの観光客が訪れ，F の家族も手伝って月に約１万元の収益を得ることができたと F が語った。「農家楽を営むことなくしては，観光客はここで消費せず，私たちの収入も見込めませんでした」と彼はうれしそうに語った。

G は１人で農家楽を運営している。彼女は彭家寨において，農家楽を早期から遂行した先駆的存在の一人とされている（図９）。農家楽の営業を開始してから約15年が経過した。G が農家楽を始めたきっかけは，政府が彭家寨の吊脚楼群を文化財保護単位に指定したことだった。以前は外で働くために出稼ぎに出ていたが，両親の介護のために彭家寨に戻り，その後農家楽の経営を始めることになった。農家楽の利用者の一人当たり平均支払額は１回あたり50～100元である。年末年始や誕生日会など，食事に来る人数はさらに多くなる。このようなリピーター客を維持するために，割引を提供することもある。村で農家楽を経営しているのは主に中高年の女性である。一部の家庭では男性も共同経営している。しかしながら，若者が運営する農家楽が人気を集めている傾向がある。この地域で最も成功している農家楽は，年間利益が少なくとも10万元に達したという。その理由としては，観光客が若者たちとの交流が好まれ，より深い会話ができ，若者が調理する料理が美味しく，香辛料が豊富に使われていると G が語った。

個人経営者である A は，以下のように筆者に述べた。個人で業務を遂行しているため，食材の準備，調理，後片付け，食器洗いなどにおいては助けを借りることができない。１日に３～４つの席を担当すると，観光客が退席した後は夜11時または12時まで，台所の片付けや洗い物

図９　Ｇの農家楽の定番料理　出所：筆者撮影（2023年1月）

を１人で行わなければならず，就寝時間はしばしば深夜１時や２時になる。立ちっぱなしの状態が続くと，腰痛が生じることがよくある。個人経営者の場合，一人で多くの業務を担当するため，長時間の労働や体力的な負担が生じることも指摘できる。

また，地元住民は農産物や畜産品を加工して，新たな製品や料理を作り出して販売するようになった。そして，地元住民の収入源となり，雇用機会を提供し，経済的な自立を促進した。地域の産業や雇用の多様化にも寄与すると考えられる。さらに，地元住民や観光客との商品をめぐる交流を通じて，地域のコミュニティ意識が高まっている。

2. 地元住民の対応

上記より，彭家寨の観光開発が地元住民に及ぼす影響を分析した。では，地元住民はどのように対応しているのであろうか。筆者が現地で行ったフィールドワークで得られたデータに基づき，これらの問いに答えてみたい。

筆者の調査によれば，開発前の村民の雇用状況は，地元の若者の多く（約70％）は出稼ぎに従事しており，彼らの主要な収入源となっている。一方，高齢者のほとんど（約80％）は農耕によって生計を立てている。開発後，農地の喪失で村内での雇用形態は，「村内で観光業に従事している」（約20％），「村内で就業しながら農業を営んでいる」（約20％），および「観光業に関連する自営業を営んでいる」（約40％）と変わった。また，農産物加工，販売，電子商取引など，比較的新しい形態の雇用もますます増えている（約30％）。

しかしながら，地元住民によれば，観光地内で安定した雇用を得るには，一定の人脈が必要とされる。例えば，観光地の警備員や清掃員として働く住民は，観光会社の管理職に親戚がいるためにその職に就くことができる。一般の人々には観光地の施設で働く機会はない。人脈の必要性から，観光業に従事できる人々は彭家寨では少ない。受付を担当しているＩは「彭家寨

で働いていると，「五険一金[16]」があり，経済が発達していない沙道溝でもより良い待遇を受けるようになった」と語った。したがって，開発初期段階では，これらの人脈を持つ人々は既に観光会社と連絡を取り，採用の内定を獲得していた。

上述のように，地元住民は観光地の施設建設や運営に従事するだけでなく，多様な収入源を模索している。ただし，このような人脈を活用できるのは全ての住民には限らないのが実情である。景区内で安定した仕事を持つことはほとんどの人にとって手の届かない夢となっている。このような状況下では，多くの人が他の道を探すことになる。現在，村では農家楽の経営が最も主要な収入源となっている。筆者の調査によれば，2022年３月時点で，地域では43軒中約10軒の家族が農家楽を経営しており，またはその経験を持っている。

筆者の調査によれば，地元住民が自身の住居を活用し，簡素な食卓や椅子を購入し，地元の食材を利用して農家楽を営業する。食材の一つの例としては，村を流れる龍潭江という川の近くで放し飼いにしている鶏や鴨の肉を使用している。春節に豚を屠殺して燻製にする。その燻製の肉を使って料理を作り，観光客に提供している。その他，野菜ももちろん当地で栽培するものが多い。もちろん，農家楽ごとに提供する料理は違うが，全部店の得意料理だ。

しかし，現在まで，農家楽を営んでいるのは主に地元の住民であり，彼らは元来資金力も弱く，観光のノウハウも知らない場合がほとんどである。そのため，彼らにとっては大きな挑戦である。A は次のように述べた。「観光客をもてなすために，自身が得意とする料理を提供することが重要であり，これによって地元の住民や外地から来た者のどちらもが彭家寨で農家楽を経営できる可能性がある」。吊脚楼を利用している住民は，収益の10% を政府に支払うことになるが，これが彼らの保証金として機能している。また，農家楽の装飾や改修工事に関しては，政府が10% から20% の補助金を提供することがある。しかし，他の少数民族観光地の事例（例えば湖南省の鳳凰古城）と比較すると，将来的には，地元で継続的に成功する可能性のある農家楽は，十分な資金力を持つか，経営能力に優れた者に限られることが予測される。現在，彭家寨で盛り上がっている「農家楽ブーム」も次第に沈静化していくだろう。

一方，一部の地元住民は小規模なビジネスを選択した。筆者の観察によれば，彼らは吊脚楼に住み，吊脚楼と一緒に観光資源の一部となっている。観光客が彼らの家を訪れると，彼らは茶を提供し，会話を交わし，自分たちの居住環境や生活様式を観光客に披露する。また，彼らは政府からの補助金を活用し，建物の内部を装飾し（吊脚楼の外観は変更できないため），家具を購入し，自分たちの居住環境を改善し，観光客が自宅を訪れる際により良い体験を提供するようにした。観光客からの吊脚楼に関する質問に対応する過程で，彼らは観光客との会話の方法を学び，次第に自分たちの居住する建物の特徴や歴史について理解を深めている。

観光客との距離が縮まると，彼らは自家製の農産物を観光客に販売する。これには燻製肉，加工されたジャガイモのでん粉またはサツマイモのでん粉，手作りの刺繍靴下などの工芸品が含まれる。A は地元住民がそういう形式で地域の特徴や文化を反映した商品を提供していると

[16] 「五険一金」は，中国の社会保険制度で，医療保険，年金，失業保険，基本医療保険，工傷保険の５つの保険と，住宅購入や改善のための公積金（退職金制度）が含まれている。これにより，労働者は病気や怪我の際の医療費や退職後の年金，失業時の給付などがサポートされ，公積金は住宅の購入や改善に利用される。中国で働く際には，これらの制度が労働者の生活と将来の安定を支える重要な役割を果たしている。

述べた。A は「米豆腐[17]やフライドポテト，水や野菜の販売など，多様な食品の提供が可能になり，これらの販売活動は観光業の存在によって実現している」と語った。

また，この地域では町（沙道溝鎮）で販売される商品よりも高価で提供されるため，町に行って商品を仕入れて販売する人もいるようである。これによって差益を得ることができる。品揃えが充実していれば需要も高まり，売れ行きも向上する。しかし，E の母も小規模ビジネスをやっているが，「ここではお肉を燻製にして販売し，『土家族臘肉』をアピールしているが，個人的には『臘肉』は土家族の特産品ではないと思っている。湖北省だけでなく，貴州省，湖南省，雲南省にもあり，特別ではない」と語った。

さらに，観光開発により，住民たちは観光客のまなざしを浴びるようになった。彼ら自身もこれに気づいている。他者のまなざしにさらされた地元住民の最初の反応は，自身の行動を反省することであった。その中で最も顕著な変化の一つは，村で住民が集まってトランプをする，賭博が行われるという現象だった。特に冬季，農作業のない時期には，皆が暇な時に集まり，トランプをすることがよくあった。しかし，観光地が開放された後，このような現象はもはや存在しない。E は筆者にこの現象について言及し，村が外部に開放されたため，住民たちは外部の人々にこれらの行為を見せたくないと自発的にこの習慣を変えたと述べた。

3. 小括

以上，筆者は観光開発が地元住民に与える影響を概説し，住民の対応について述べてきた。まずは観光開発がもたらす経済的な影響に重点を置いて説明した。彭家寨の観光開発では，経済的な側面から言えば，雇用機会をもたらし，地元住民の収入を一定程度増加させた。しかし，地元住民の視点からは，まだまだ多くの問題が存在している。例えば，村内で観光業に従事する機会が少なく，農家楽の経営も容易ではないという点が挙げられる。

住民の対応を分析する際，筆者は観光開発前後の住民の雇用形態や生活様式を比較した。結論として，住民たちは観光開発に直面し，自身の条件を考慮して「農家楽のブーム」を起こしたが，観光開発や地域経済の成熟に伴い，過去の事例や同様の観光地の経験から得られる知見から，筆者はこのブームが時間とともに沈静化すると考えている。また，彼らはビジネスを始めることも始めた。他の側面では，彼らは自身が観光資源の一部であることを受け入れ，観光活動に参加し，観光客の動向に注意を払うようになった。

おわりに

本研究では，実地調査を通じ，彭家寨の基本的な状況と観光開発のプロセスを明らかにした。そして，政府，観光会社，民族エリートと地元住民がそれぞれ果たした役割と貢献に焦点を当てた。また，観光開発が地元住民に与える影響と地元住民の対応についても分析した。

まず彭家寨の観光開発には三つの特徴がある。一つ目は人工的に作られた観光村ではなく，少数民族が実際に生活する村が観光スポットとなった点である。つまり，観光会社と政府が宣伝している「汎博物館」である。二つ目は政府主導のもと，外部の観光会社が進出して地元住

[17] 中国南方で広く作られている食べ物。水に漬けた米を臼で挽き，水を加えて煮立たせ，冷ましたところにニガリを加えて固める。

民が参加している観光開発が進められていることである。三つ目は開発によって「土家族式」とされる建物や装飾が施されたが，地元住民の認識とはずれが生じていることである。

彭家寨の基本的な状況を調査する過程で，観光開発に不利な特徴もいくつか発見した。まず，彭家寨は小規模な民族村落であり，観光スポットの空間容量も限られている。地元住民も約300人しかいない。また，民族村落の景観は吊脚楼群が中心であり，単一の景区だといえる。開発者は新たに「摩霄楼」などの景観を建設し，それに土家族の精神的象徴を冠したが，観光客や地元住民の評価は賛否があり，また地元土家族の一部は「摩霄楼」を精神的象徴と認めていない。最後に，彭家寨の立地条件は良くなく，都市から遠く，交通の便が悪い山岳地域に位置している。しかし，道路の建設によりこの困難は克服されつつある。第１章の分析とともに考えると，多くの民族小村落は不利な条件を克服するために様々な措置を講じている。例えば，政府が道路などのインフラを整備し，観光会社が観光地を受託した後に民族の要素を追加して観光客をひきつけている。

観光開発により，彭家寨は経済的な面でいくつかの利益を享受している。観光業による雇用機会の増加や地元住民の収入向上は，地域経済の発展に貢献している。また，地元住民は観光開発を通じて新しい仕事の形態や技術を学び，自己の経済的状況を改善する機会を得た。しかし，地元住民の視点から見れば，これは彼らが長年にわたり守ってきた伝統的な農耕生活に対する変遷であり，土地をほぼ完全に喪失したため，第一次産業から第三次産業への転換を余儀なくされたことを意味する。

そして，土家族地域の彭家寨における観光開発への地元住民の対応は多様である。一部の住民は農家楽の経営に取り組み，観光客に対して独自のサービスや体験を提供している。また，一部の住民は自営業や小規模なビジネスを始め，地域の資源や文化を活用して収入を得る努力をしている。

これらの結果から，彭家寨の観光開発は地域経済の一定の発展をもたらしたが，課題も存在する。地元住民の利益を重視し，参加型の開発手法や適切なコミュニケーションが重要である。また，地域社会の持続可能な発展を確保するために，開発業者や政府は地元住民とのパートナーシップを強化し，共同での計画立案と意思決定に取り組む必要があるではないだろうか。これにより，彭家寨の観光開発は地域社会の経済的繁栄と文化的豊かさを実現することができるのであろう。

最後に，本研究の今後の展望について述べたい。本研究では彭家寨における観光開発の現状と地元住民への影響を中心に分析を行ったが，今後はさらに深化した分析が求められる。観光開発が進む中で，地域の文化や伝統が新たな形で展示され，観光客との交流が増えることが予想される。地元住民が自身の文化やアイデンティティを保持しつつ，観光客との関係を築くことは今後の課題である。したがって，民族観光の観光開発は，段階的な開発を区分し，各段階の特徴を把握し，将来の発展方向を予測するための追跡調査が重要と考えられる。

参照文献

兼重努　2008「民族観光の産業化と地元民の対応」『中国21』３：133–160風媒社.

高軍波　2006「我国郷村旅遊発展中農戸利益分配問題与対策研究」『桂林旅遊高等専科学校学

報』(05): 577–580.
胡蘭　2017「民族旅遊開発背景下土家族歴史記憶的重塑」廈門大学.
呉忠軍，張瑾　2008「民族旅遊開発中東道主間関係的人類学研究」『貴州民族研究』28(06): 62–69.
呉忠軍，潘福之　2013「民族旅遊開発中農民利益問題研究――以竜脊梯田平安壮寨為例」『安徽農業科学』41(13): 5828–5829.
肖人夫，唐莉霞　2015「従“当地人”利益群体看民族地区旅遊開発――以湖南省鳳凰県為個案」『貴州民族研究』36(10): 151–154.
史夢薇　2010「民族旅遊開発背景下郷村精英的研究――以貴陽市花渓区鎮山村為個案」『法制与社会』(11): 226.
宣恩県誌編纂委員会　1995『宣恩県誌』　武漢工業大学出版社
曾麗萍　2016「少数民族村寨居民参与旅遊開発的路径初探」『経済研究導刊』(09): 164–165.
曽士才　1998「中国のエスニック・ツーリズム―少数民族の若者たちと民族文化―」『中国21』３：43–68風媒社.
孫雲娟　2020「少数民族地区生態文化旅遊発展――以恩施土家族弔脚楼村寨為例」『社会科学家』(04): 80-85.
中国国家統計局　2021『中国統計年鑑　2021』「2-22 分民族，性別的人口数」中国統計出版社
張良皋　2001『武陵土家』生活・讀書・新知三聯書店.
陶慧，張夢真，劉家明　2023「武陵山区民族村寨家園遺産演化与地方重構」『地理学報』78(04): 997–1014.
孟浩宇　2023「中国におけるエコツーリズムの現状―内モンゴルバヤンノール市を事例として」.
楊麗瓊　2011「旅遊開発中少数民族婦女社会角色変遷研究――基于大理新華白族旅遊村的案例分析」『旅遊研究』 3 (02): 48–51.
羅永常　2012「論少数民族伝統郷村旅遊開発中的六大関係――以黔東南民族旅遊村寨為例」『中国区域科学協会区域旅遊開発専業委員会，湖北省農業庁，湖北省旅遊局．第十六届全国区域旅遊開発学術研討会論文集』: 307–312.
李輔敏，趙春波　2014「旅遊開発背景下民族地区生計方式的変遷――以貴州省黔東南苗族侗族自治州郎徳上寨為例」『貴州民族研究』35(01): 125–128.
竜梅　2009「人類学視野下的民族旅遊開発」『求索』(09): 64–66.

資料

武漢華中科大建築規劃設計研究院有限公司　2017『中国土家族汎博物館（彭家寨）項目フィジビリティスタディ（実現可能性）研究報告』

ウエブサイト

恩施女児城
https://baike.baidu.com/item/%E6%81%A9%E6%96%BD%E5%9C%9F%E5%AE%B6%E5%A5%B3

%E5%84%BF%E5%9F%8E/7394260（最後閲覧日：2023年10月24日）

恩施土司城
https://baike.baidu.com/item/%E6%81%A9%E6%96%BD%E5%9C%9F%E5%8F%B8%E5%9F%8E/8373934（最後閲覧日：2023年10月24日）

宣恩県人民政府　旅游産業2015年項目計劃及十三五項目発展規劃
http://www.xe.gov.cn/xxgk/dfbmpttlj/xz/xwlj/fdzdgknr/ghxx/202110/t20211026_1185614.shtml（最後閲覧日：2023年10月24日）

彭家寨旅遊景区招商手冊
http://www.xe.gov.cn/xxgk/gkml/tzgg_1/202102/t20210223_1101815.shtml（最後閲覧日：2023年10月24日）

宣恩要聞 沙道溝興建彭家寨文化広場
http://www.xe.gov.cn/xwdt/xeyw/201907/t20190725_469349.shtml（最後閲覧日：2023年10月24日）

宣恩要聞 沙道溝整修彭家寨景区道路
http://www.xe.gov.cn/xwdt/xeyw/201907/t20190725_468532.shtml（最後閲覧日：2023年10月24日）

宣恩要聞 彭家寨旅遊景区安全管理出実招
http://www.xe.gov.cn/xwdt/xeyw/201907/t20190725_469715.shtml（最後閲覧日：2023年10月24日）

宣恩要聞 中国土家泛博物館（彭家寨）総体規劃通過専家評審
http://www.xe.gov.cn/xwdt/xeyw/201907/t20190725_486992.shtml（最後閲覧日：2023年10月24日）